

気仙町上長部の公民館での振る舞い企画。関西の生協のボランティア、いわて生協のボランティアと地元の方との交流。テーブルの上も岩手のつみれ汁と大阪のたこ焼きが仲良く並ぶ。



陸前高田に復興の槌音あり 関西3生協のバスボランティア

2014年7月19日と20日、

おおさかパルコープ・大阪よどがわ市民生協・ならコープの3生協のバスボランティアは、
陸前高田市内各地でいわて生協バスボランティアと協同で活動・交流しました。

関西の3生協は2011年から継続的に活動を続け、
14年度も16回の活動を予定しています。



『雨にも負けず』の精神で
復興をお手伝い

関西3生協のバスボランティア一行は18日の夜に京橋（大阪市）を出発しました。あいにく、到着日の19日は雨。この日は陸前高田の集会所での交流のみになりましたが、地元の方のお話を聞いて「明日はぜひ、活動を」と参加者の士気は高まりました。翌20日は、前日に増して本格的な雨。天候の回復が見込めないなか、レインウェアや作業着、ビニール合羽などで身支度をして、いわて生協のボランティアと協同で支援している3箇所に向かいました。

最も大変だった作業は春に椿の植樹をした小友町の草刈りで、この2カ月で人の背丈ほどとも雑草が繁殖し、雨の中、植樹した場所を探すのも一苦労。草刈り機では苗木ごと切り倒してしまいかねないので、手作業で丁寧に対処していく必要があります。一方、米崎町では、NPO法人「再生の里ヤルキタウン」の高台の手入れを行ないました。憩いの場でもある有名な松原を津波で失ってしまいましたが、それに替わって四季折々の花が咲き誇る「花画廊」を作る計画で、一角



草刈りをしてない箇所(右)と植樹した椿の苗を見つけて草刈りした箇所。

にはおかやまコープが植樹した桜があり、1カ月前はここで福井県民生協のボランティアが球根を植えました。椿にしるお花畑にしる、いろいろな団体と生協が、この陸前高田でつながっている様子がかげえれます。

感謝の気持ちを胸に 上長部の郷に集まる笑顔

汗と雨にぬれたボランティアにとって、一番のお楽しみは気仙町上長部の公民館での「上長部の郷大感謝祭」です。

この地区は住民の結束力が強く、津波被害にあった住民がお互い声



たこ焼きを作ったボランティアもピザを作った地元の子もピース。

を掛け合い、小松菜や小麦を一緒に耕し、集会所の交流で絆を深め、高台移転の計画にもいち早く取り掛かりました。この日は住民が、継続して支援してくれたボランティアへの感謝の気持ちを込めて、地元漁師さんから頂きたいわしを使つたつみれ汁や石釜で焼いたピザ、地元で取れた南部小麦に黒糖を練りこんだおやきなど100人分を用意し、地域のイベントとして振る舞いました。



上長部「おがさんの会」の女性たち。2列目左が菅野静子さん。

関西3生協のボランティアも十八番のたこ焼きを振る舞います。普段から家でたこ焼きパーティーを行なうという若い女性は、きつね色に焼けたたこ焼きを「たこ焼き返し」と呼ばれるキリで手際よく回転させます。ならコープのボランティアとして来た大学生は「生協がやっているから安心して参加できる」と、地元の子が焼いてくれたピザを手に笑顔で答えてくれました。

ものでした。菅野さんは、この公民館ができた13年1月が復興元年だったと言います。

「高台の住宅も、公民館も支援をしてくれた人がいたからできたことです。生き残ったことを含めて感謝し、恩を返していこう、残ったみんなが家族になろう、子どもたちの目からどう見えるかを意識して行動しようと思いました」

その思いで、子どもたちの遊び場づくりや、ボランティアへの昼食づくりなど、みんなで一緒にできることを続けてきました。

午前の活動ですぶぬれになったボランティアに声を掛け、温かいものは大きいけれど、周囲との絆は以前より強くなったと言います。ある男性は大感謝祭のためにカブト虫やクワガタを取ってきました。ここには子どもたちのたくさん笑顔がありました。

常駐者を置く。パルコープの腰を据えて支援する

振る舞い企画が終わるとテントなど使った資材をバスに持ち帰らず、集会所の物置に片付け始めました。聞くと、関西3生協のボランティアの資材専用の物置とのこと。

もう、ここに来るのが当たり前になつているのです。おおさかパルコープの東日本大震災・対策本部事務局、林輝泰はなびてるやすさんは震災から2カ月の11年5月から現地駐在として岩手県に入りました。現在は遠野市のNPO法人に向向して現地との窓口・調整を担い、3年間で延べ人数2,000人以上のボランティアを受け入れてきました。もともと事業連帯の関係にあつて近い大阪よどがわ市民生協と共に、ならコープとは支援担当者同士の信頼関係もあつて3生協合同の活動になったそうです。

腰を据えて復興に取り組み4年目を迎える林さんですが、現地の状況は「一様ではありません。『これからは3生協は協同組合の原点、『たすけあい』『まなび合い』『微力は無力ではない』を合言葉に活動を続けていきます」と話してくれました。



駐在4年目を迎えるおおさかパルコープの事務局、林輝泰さん。

緊急支援から生活再建へ コミュニティの 再生を目指す

岩手県の南東部に位置する釜石市の社会福祉協議会は、ボランティアの受け入れ・調整を行ってきた「災害ボランティアセンター」を、「生活ご安心センター」と改称し、より地域に密着した活動に取り組んでいます。同センターの菊池亮副センター長に、復興の状況と求められる支援についてお伺いしました。

——様ではない生活再建への道のり

東日本大震災の直後から緊急支援の受け皿として、被災地の社会福祉協議会（社協）はボランティアセンターを設置しています。震災から半年たち、生活支援に比重が移つてくると、仕事の質も変わってきて、「いつまでも災害ボランティアセンターという名前ではないよね」ということで、戸別訪問やコミュニティの再生など機能も加えたセクションを立ち上げ、2011年12月から「生活ご安心セン



釜石市社会福祉協議会地域福祉課「生活ご安心センター」の菊池 亮さん。

ター」という名称で活動しています。

復興へのステップは住まいで整理するの
が分かりやすいと思います。命をつなぎと
める時期は避難所、生活を安定させる時
期は仮設住宅、生活を再建する災害公営
住宅の三つのステップです。避難所よりは
仮設住宅が良いから、仮設への移行は割と
希望に満ちてスムーズに行なわれます。そ
こから災害公営住宅への移行がまさに今
なんですけど、これは一様にはいきません。
まず数の問題です。釜石市は早いうち
から復興計画をオープンにしていたこと
もあり、住宅1、300戸前後が必要とさ
れているところに、県営市営併せて300
戸近く出来上がっています。進捗率は県
内でもトップクラスですが、用地の問題も
あり、すべての建設にはまだ2、3年はか
かると思われます。

——仮の生活と思えば我慢できたが

仮設住宅のくらしに我慢できたのは東

北人らしい粘りもありましたが、今までは仮の生活だと思って我慢できていたという部分もあります。その生活をリセットしたいという、いろいろな思いを持つて公営住宅に入るのですが、その立地や隣近所の人など、100%希望通りの住まいに入れるわけではないので、思ったほどバラ色じゃないというギャップが生じます。新しい環境なので折り合いをつけていくしんどさもあります。特に男性は頼むとか頼まれるとかの関係づくりが苦手です。仮設住宅では、仮の生活ということでした「生きる」ことで我慢してきたけど、家庭や地域での自分らしい役割を見たいという思いを抱えて悩んでおられる方も多

いです。

一方、不安を抱えて公営住宅に移れないという人もいます。一つは家賃という金銭的な不安があります。慣れ親しんだ仮設住宅のコミュニティを離れ、人間関係をつくり直すことへの不安もあるし、公営住宅の多くが高台にあるため、交通の便の不安もあります。特に冬場の買い物や通院は心配の種になっています。公営住宅を終の棲家と考える人もいれば、一時的な住まいと考える人もいますので、そこでコミュニティをどう構築していくか、支援が必要になっています。

——こまやかかつ継続的な支援が必要

残された仮設住宅の方への対応を含め、



釜石市の上中島第1期復興公営住宅を訪ねる社会福祉協議会のスタッフ。

求められる支援は多様かつ専門的になり、コミュニティ能力が求められる場面が多くなっています。余暇支援とか、癒やしや楽しさにつながるもの、生業とまでいかななくてもお小遣いづくりにつながる作業とか、支援の枠組みづくりが求められるし、一気にやって「はい、終わり」というものではなく、活動に継続性も必要です。そこではボランティアのコーディネーターと共に、長く活動できるベテランボランティアも求められています。

これからしばらくは引越越し支援の活動も多くなりますが、もともとが過疎化している町で、数少ない人手が工事関連に取られ、ボランティアをできる地元の人はい少ないです。そこで社協のネットワークを生かして内陸の社協に人を連れてきてもらってボランティアの担い手を育成・確保していきたいと考えています。もちろん生活との連携も大歓迎です。